
獺は幸福の夢を見る

秋助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

獺は幸福の夢を見る

【Nコード】

N0820J

【作者名】

秋助

【あらすじ】

文化祭。高校生の『私』・悪い夢を見せる『獺』。つまらなくはないけど、楽しくない。そんな日常を生きてきた

(前書き)

アーティスティック部の部誌『夢路』に載せた小説です。今までで一番長いですが、どうか飽きずに最後まで読んでもらえれば幸いです

文化祭の初日が終わる。私のクラスは駄菓子喫茶を催した。簡単に説明すれば、定価で買い揃えた駄菓子と手作りのお菓子を原価より少しだけ高い値段でお客さんに売るだけだけど、手間を加えた教室の装飾や、手作りのクッキーとケーキの味が相まってお客さんの数は上々だった。……という話。

グループは接客班・呼込班・調理班があり、私は何かあったときのための待機班。つまりどこのグループにも入れなかった余り者。どうしたらいいか困っている私に『何かあったら呼ぶから』と同じクラスの誰かに言われたので、このまま家に帰ろうかなんて思ったけど、高校の文化祭は最後まで残ることが強制されている。仕方ないので一通り校内を回ってみることにしたが、バツが悪いので教室には寄り付かなかった。よって好評か不評かなんて知る由もない。

校内にはお化け屋敷。占いの館。焼きそば。映研の自主映画。文芸部の部誌販売。どれも文化祭の定番すぎてつまらなかった。

そう言えば妹が演劇部の公演で主役を演じるらしい。確か公演名は……、忘れた。それ以前に記憶にない。理由は妹が出るから。

変わり映えのしない今日が眠る前、文化祭の話ともう一つ、夢のメカニズムを思い出す。高三の生活も後半に入り、具体的に進路の話となった。『自分が将来なりたいもの』・『子供の頃に描いていた夢』。そんなことを誰かが話している内に会話が純粹に夢の話へ変化する。

夢を見る具体的な理由は不明らしい。だけど、夢の存在定義には二つの説がある。一つは『無意味な情報を捨て去る際に知覚される現象』。もう一つは『必要な情報を忘れないようにする活動の際に知覚される現象』

でも、私が望む夢は恐らく前者。だから『普段は特に意識していない願望や、普段の生活から興味がある現象についての夢を見やすい』という情報は、どうにも嘘にしか聞こえなかった。

私は、誰かの見る夢の一部かも知れない。同じような毎日で、嬉しいも悲しいもなくて、会話の内容も覚えてなくて、ニユースから得られるものもなくて、何処か現実味が帯びない現実だから、つまらない日常も我慢出来たんだ。明日になれば最後の最後に「実は全部夢でした」って、知らない誰かが種明かしをしてくれるかも。今日見る夢の終わりが明日の現実の始まりでありますように。いつもそう願って私は、ベッドの中で眼を閉じた。

*

*

私は教室で楽しそうに友達と笑っていた。お昼休みには一つ年下の妹に会ってお昼を食べる。それから彼氏と途中まで一緒に家へと帰る。何気ない日常が一番楽しいと思えた。私がついて、妹がついて、彼氏がいて、友達がいる。普通の世界。そんな、そのような、

悪い夢を見た。現実とは程遠い、望まれない夢物語。

ふと、枕元に手をやると汗で湿っている。喉がカラカラで、体中の水分がシートに奪われる。それほどまでに私の見た夢は気持ちが悪かった。

『普段は特に意識していない願望や、普段の生活から興味がある現象についての夢を見やすい』。昨日の昼休み、私の耳元に入ってきた誰かの言葉を思い出す。じゃあアレは、あの夢は私が望むもの？それだけは絶対にありえないと心の中で呟いて、ベッドから立ち上がろうとした。瞬間、黒白色の斑模様が視界に映る。

「……………え？」

カーテンから差し込む逆光のせいで、ソレが何なのかは解からない。部屋全体には音という音が遮断されたように静寂が包み、重い空気が流れ込む。しとり、ぼたり、汗が額から垂れる。

ぼんやりと薄青く発光する二つの丸い眼球がひたすら私を凝視した
「……………」長い「……………」長い沈黙「誰か……………」いるの？」と
いう問いの後、

「悪い夢は見れました？」

やけに子供っぽい声だった。男の子とも女の子とも区別のつかない
くらいの幼い声が、水中から言葉を発して頭の中へ直接入り込んで
くるように響く。

「……………ええ、とつても」

自分にも言い聞かせるように、息を殺して声の持ち主を探す。

「僕には幸せそうに見えました」

「見てないくせに」

「見てました。それに、「二つの丸い眼球は鋭く光り、ビュウ、ビ
ュウ、という音と共に私へと近付いた。手を少し伸ばすだけで届い
てしまう距離なのに、威圧感はなく寒気とは違う冷気が肌を刺す。

「食べることが出来ました」「食べ、る？」

「食べることが出来たから、きつと悪い夢なんでしょうね」

姿形は解からないけど、とても悲しい声だった。

「あなたは、誰……………なの？」

現状を把握しようとすることで、私の不安を消そうとする。

「僕は「触れる。核心に「獏です」

「ばく……………？」

「はい。人の悪い夢を食べる生き物の、あ……………なりそこないです」
「なりそこない？」悪い夢を食べる……………。獏の？

「さつきから疑問ばかりですね」

それが通常の思考だと思う。目覚めたらいつもと違う雰囲気を広
がって、目の前には得体の知れない存在がいるのだから。この状況
は理解し難いことだらけ。無知の知を自覚するには時間が掛かりそ
うなので、知らないことを知ろうとするより、知りたいことを知る
うとする方が断然早い。だから、私は私の不確定を投げ掛けた。

「まだ、夢の中？」

「じゃあ確かめますか？」

暗闇から手が伸びて、私の頭の中に入り込んで、そのまま、ズブズブと。やめる。私の、私の 記憶に 触れるな。

side B 1 十月二十四日（木曜日）

もしもそれを幸せな夢と言うのなら、僕にはそれが解からない。

僕の見る夢は、正確には誰かが見る夢は悪い夢ばかり。獺は自身で夢を見ることができないから、獺は誰かの悪い夢しか覗けないから、それが幸せな夢かどうか解からない。

だけど、悪い夢の中で起きている全ての出来事が悪いことばかりとに限らない。小さなことで笑ったり、好きな人が隣にいるだけで喜んだり。「悪い夢」だと言った彼女は、同時に「幸せ」だと言った。だから、僕は彼女を知りたくなかった。

彼女の見る夢の持つ意味を。

本来、悪い夢の持ち主と接することは許されない。というより、夢は寝てる間にしか見ないので、悪い夢を喰らい消え去る獺と、夢の持ち主は実質上すれ違う。互いが接触してしまう原因は二つ。一つは『獺が規律を破るとき』。もう一つは『悪い夢を喰べられてる最中に夢の持ち主が目覚めるとき』。どちらもイレギュラー。

今回のケースは後者。普通なら絶対にこのような事態は起こらない。僕が『なりそこない』じゃなかったら……。この足が、この両の手が、この胸が、不完全。

『誰か、いるの？』

『あなたは、誰……なの？』

『ばく……？』

『なりそこない？』

『まだ、夢の中？』

彼女は彼女の不確定を投げ掛けた。

彼女も知りたがっている。

それを言い訳に僕は彼女の記憶に手を伸ばす。

『じゃあ確かめますか？』

ズブズブと入り込み、要らない情報が、知りたくない経験が、一瞬で彷徨い彼方まで駆け抜けて、意識が飛びそうになる。それは彼女も同じことであり、僕の手を引き離そうとする。が、彼女の手は僕をすり抜けて体勢を崩す。瞬間、僕と彼女が重なって、学校のプールに飛び込んだように、記憶が、映像が、水飛沫となって僕の頭に流れ込む。破片になって映る彼女は笑ってた。とても、美しく。

「悪い夢には思えませんでした」

独り言を呟いた。

「悪い夢だと思ったから来たんでしょ？」

違う。

「君が悪い夢だと思ったから現れました」

夢の持ち主がそれを『悪い夢』だと判断しない限り、僕はその夢に干渉できない。だからこれは悪い夢。そして彼女の悪い夢を喰らっておしまい。それだけの話だと思っていた。

だけど、僕には許せなかったんだ。君はとっても幸せなのに。

僕にも確かに幸せな記憶があったハズなのに。

彼女の、心の奥底に触れた。

side A 2 十月二十五日（金曜日）

昔から友達を作るのが下手だった。

大抵、周辺の人達の流れによると、小学生の場合は幼い好奇心から自然に友達の輪を作り、中学生の場合はそのほとんどが小学生からの付き合いなので、いくら環境が変わるといっても劇的に関係が変わるわけではない。むしろ昔からの友人にプラスして、そこから新しい交流が広がるのが大半だと思う。

高校生は、高校生だけは少し違う。仲良しグループが一緒に受験したり、たまたま友達が同じ高校を受験したり、多数派の行動を除け

ば周りには知らない人ばかり。そういった状況の中で友好関係を築き上げられるほど私は人付き合いが上手くない。

でも、私は教室の窓際で文庫本に読み耽っているだけで幸せなのだ。特に欲しい本もなく気まぐれに立ち寄った古本屋。そこで見つけた一冊の本は私の退屈を蹴飛ばすには丁度良い内容だった。

私は『家族モノ』が好きなのかも知れない。『好き』と表現するよりは『こうなったらいいのにな』という『憧れ』や『願望』の方がこの気持ちを的確に言い表している。

再放送で観た『家族再生』がテーマのドキュメントでは、ラストシーンで涙を堪え切れなくなった。ボロボロでグチャグチャだった家族関係が、ぎこちないなりに元通りになっていくラストシーン。きつと、心の何処かでそれを望んでいた。私と妹の関係が、元通りになりますようにって。……ん、元通り？ 壊れてなんかいないのに？ 壊れてなんかいないけど。歪な形をムリヤリに保っているから、ヒビが入りかけているだけだ。キシリ、パキン、目を覚ます。

*

*

そこからどのように教室まで辿り着いたかは覚えていない。

ただ、気が付いたら窓際の席に座っていた。ほんとは左から二番目、後ろから三番目の机が私の席なんだけど気にしない。

文化祭最終日。駄菓子在庫。調理班のシフトなどの最終確認のためにクラス全員が一度教室に集まることになった。

黒板の真上に設置してある掛け時計に視線を向けると、文化祭が始まる僅か十分前だった。普通なら文化祭当日の緊張感や独特な雰囲気があるものだが、このクラスの人達は行事などに特に無関心であるため、開始前の会話も『……って、のことが好きなんだってー』とか『部活の先輩が恐くてさー』とか、いつもと変わらない話をしていて。正直、他に交わす話題はないのかと感じる。

でも、昨日は珍しく『夢』の話をする生徒がいた。『将来実現した

「願い・理想」の『夢』ではなく、『睡眠中に見る』方の『夢』。
変に夢のメカニズムを聴いたせいで悪い夢を見た。家族と一緒にい
る日常の。何でも無い平凡の。その生徒のせいではないけれど、逆
恨みでもしないとこのどうしようもない感情の捌け口が見つからな
い。その代わり自己処理の苦手な私の弱さを見せつけられた。

「……あ」妹だ。

窓際から外の景色を眺めていると、髪の毛をボサボサにしながら走
ってくる妹の姿を捉えた。ちよつとはスカートの丈を気にしろ。急
いで地面を大きく蹴って、……転んだ。

昔から妹は足が纏れるくせがあり、『走るな』と注意しても駆け出
しては転ぶの繰り返しだった。その度に私が手を引いて、泣き出し
そうな妹に向かって『大丈夫だよ』と投げ掛けていた。
妹が体勢を立て直してまた走る。

というか、誰も私が違う席に座っていることに疑問を抱かないのが
不思議。それほどまでにこのクラスは他人の状況変化に疎いのか？
単に私に興味がないだけだとは思っけど。

それを考えると気持ち悪くなってきた。疎い。疎ましい。なにこの
教室に『いる』のに何処にも『いない』ような感覚は。

段々と気分が悪くなり意識が遠退いていく。机からずり落ちて、見
上げなくても天井が見える形となった。あのさ、あのさあ、いい加
減にしてくんない？ 誰でもいいから助けるよ。……なんか、声が
聞こえる。私の手を握って、誰か。ふわっと、抱き抱えられた。

*

*

四月が終わるころ、私と妹はグラウンドの隅で演劇部の活動風景を
眺めていた。

演劇部は毎年この時期になると、勧誘や部活紹介を兼ねて外で発声
練習や小道具作りをしている。一日中響き渡るノコギリの音は演劇
部の伝統行事らしい。

「演劇部？」 「演劇部」 「誰が？」 「私が」 「あんだどうせ好きな人が演劇部にいるから入部したいだけなんですよ？」 「……………」 「ちが、」 「はい目え逸らしたー」 「うるさいな、このバカ姉が」 「興味もないくせに入部して、つまんなくなつて止めても知らないよー」 「……………興味あるもん」 「好きな人に？」 「演劇に」 「……………んで、好きな人つて誰？ 私の知ってる人？」 「さん……………え？ ごめん。もう一回言つて」 「ノコギリの音が、演劇部員の声々が、うるさん」 「……………」 「あ」 その人のことはとてもよく知っていた。…………… 「ん」

「あ、起きた」

目を覚ますと天井を見つめていた。身長測定器やよく分からない薬品が大量にあつたので、ここが保健室だと理解する。ベッドの横には逆光で顔が分からないけど、きつと私を保健室まで運んでくれた人なのだろう。そんなことをしてくれる狂人があのクラスにいうとは。恩人に向かつての口の聞き方ではないと思うけど、まずは正体を確認する。

「誰……………ですか？」

「酷いな。同じ組なのに」

「僕の机近くで倒れてるから、保健室まで連れてきたんだけど……………駄目だった？」

「……………別に」

あの机の持ち主か。普通な、本当に目立ったところがない人。

「みんな目を見合わせたり見て見ぬふりするだけなんだよ。前々から関わりがあまりないなとは思ってたけど、ここまでとなると怖いというより気持ち悪かった」

それは……………、当然のことだと思う。私と関わろうなんて物好きはいないに決まつてる。というか、なんでみんなから嫌われてるんだ？ いや、興味がないだけか。今日で二回目。

「そついえば、寝てる間に女の子の名前を呼んでたけど。妹さん？」 「……………いや、ま……………かも？」

「何で疑問系なの？ まあ、人には色々事情があるから詳しくは聞かないけど。妹さんだったら公演の裏話でも聞きたいなー、と」
「公演？」……あ「文化祭は？」

掛け時計に目を向けると既に時間は十六時近くだった。

「ん、大体は終わったよ。あとは後夜祭くらいかな？」

「あー……うん」

終わったんだ。高校最後の文化祭なのに。まあ、興味ないけど。私がいざらくぼーっとしていると「ずっと寝てんのは勿体ないよ」と言ってきた。私が寝惚けると勘違いしたらしい。

「……もしかして、ずっと側にいたの？」

「あ、え？ 違っつて。一通り回ったから様子を見にきたんだよ」

「……そう」

「ねえ、公演観に行かない？」

「え？ いや、だつて」妹がいるし。でも、あの人もいるけど。

「もしかして演劇とか、……嫌い？」「……いや」

同じクラスだけど名前も知らないような人と一緒に観に行きたくないし。とは流石に言えるわけなかった。だけど、半年くらい前の会話を思い出す。

『文化祭の公演観にきてよ』

演劇部の部長さんから言われた言葉。そのときは確か『はい。絶対に行きます』と答えたと思う。今は……、

「でも……」

「あ、そうだよ。急にごめんね。じゃあ行つてくるから」

私の返事も待たないで保健室から出て行くこととする。ほんとは、行きたいよ。部長にも、一応妹にも会いたいんだ。だけど、下らない自尊心が働いてそれを邪魔してくる。待つて。私も、ほんとは、私も……、

「……行く」

「ん、りょーかい」

その人は静かに微笑んだ。

＊

＊

演劇は……、演劇にはむしろ興味がある。妹が『名前だけでもいいから』と友人に誘われて入部したので、一度だけ様子を見に行つたことがある。練習終わりに妹が私に気付き、部長を、妹の気になる人を紹介してもらつた。

その人はとても演劇のことを愛していて、私の聞くこと聞かないことをとにかく話してくれた。妹はその光景をとて疎ましく見ていたけど、私は正直嬉しかったりする。

『演劇つてのはさ、たまに孤独になつたりするんだよね。役に入り込んだりすると楽しいけど、たまに自分を見失うときがあるんだ。まるで自分の存在が役に飲まれて消失したように。……あー、なんか番組で似たようなこと言つてた気がする。何だっけな？』

『……ある』という事は同時に『ない』という事で。『ない』という事は同時に『ある』という事で。……ですか？』

この前観たドキュメント番組で子供が言つていた。

『あーうん。それだね。そんな感覚』

それがどんな感覚なのかは分からないけど、そろそろ妹の不機嫌さが限界に達してきてるといふのは分かつたので、あるはずもない用事を言い訳に帰ることにする。帰り際に部長が『文化祭の公演観にきてよ』と言つたのをキツカケに、妹から殴られた。

夕御飯のときも不機嫌だつた妹は、私の部屋に入つてくるなり延々と雑談を始めた。演劇の話。教室に入り込んだ猫の話。昨日見た夢の話。喋り終えて、とても長い呼吸を一つ。

そして、

『あのさ』 『うん？』 『もしかしてお姉ちゃんつて』 やつぱり私の妹なんだと再確認した。好きなタイプも、好きな性格も、昔から似過ぎてた『部長のこと』 ……うん。ごめん。不可抗力だつたんだ。

……………。開演を待つ間、少し昔を思い出す。思えばあのときか

ら私と妹の關係に變化が訪れたのかも知れない。特に嫌いでも好きでもなく。歪な姉妹の出来上がり。

「間もなく公演が始まります。携帯電話など音の出る機械の電源はお切りいただき、公演中のカメラ・ビデオ撮影はご遠慮ください」

客席上から見て左上に設置されたスピーカーからアナウンスが流れ、本番前に流れる独特の雰囲気が見物客を騒めかした。

客入れの音楽が次第に小さくなっていき、それに伴って私の心臓は大きく高鳴る。もうすぐ部長が、私の知らない妹が、別空間の住人となって現れる。私が見ている夢から更に夢の世界へと誘って。

そして、世界から少しずつ光が失われていくのを眺めつつ、

「そう言えば公演名って……？」

「ん？ あー」少し溜めて「ライオン」

夜明け前から朝に変わる瞬間のように、照明は光を生みだした。

*

*

『夢のようで本当は現実だったのと、現実のようで本当は夢だったのではどちらが不幸だと思う？ 例えば好きな人と仲良く日常生活を過ごす夢を見たとする。前者の場合、本当は現実なのだから嬉しいよね？ でもそれが後者だったら？ 幸せな時間だと思っていた毎日が実は夢だった。それを【夢でも好きな人に会えて嬉しい！】と思う人もいれば、【切なくなるから夢でも会いたくない】と言う人もいる。結局は夢の持ち主の捉え方なんだ。君はそれを悪い夢だと言った。だけど、僕には幸せそうに見えた。もちろん、それは僕の主観。捉え方の問題だ。でも、この話を聞いたのなら考え方を少し変えて欲しい。さて、じゃあ本題。それは、本当にその夢は、『悪い夢だった？』

昨日見た小説の一文を思い出す。

今、この物語がお芝居ではなく現実だとしたら、妹にとっては夢のような話だろう。『ライオン』は好きな同級生に告白できずに悩

んでいる放送部員の女の子、つまり妹が演じる部員が同じ部の友達に相談したところ。特権を勝手に使い、お昼の校内放送で公開告白をすることを勧められたという話。

放送室前には生徒が一人。部長だ。放送を中止させようとする職員を静止させるために頑なに扉を守っている。しかし、朝から降り続ける雨と鳴り止まない雷のせいでスピーカーは故障してしまい、女の子の想いは口にする前に途切れてしまう。

だけど、部長が扉の外から必死で叫ぶ。届かなくっても、かっこ悪くても、自分の声で叫ぶんだって。本当に好きなら、叫べって。

雨と雷音は激しさを更に増す。戸惑いを隠せない女の子はマイクを手に取って、深い呼吸のあとに、喜怒哀楽の哀だけ壊れたように泣いた。もちろん演技だとは思うのけど、妹の泣いてる姿なんて久しぶりに見る。それから女の子は、妹は同級生ではなく扉の前の生徒に向って全力で、……………吼えた。

一瞬、妹の感情の暴走で、台本にないことをしたのかと焦った。でも、舞台の展開を追っていくと物語は正しく紡がれる。本当は同級生のことが好きではなかったこと。本当に好きなのは扉の前の女の子だったこと。嫉妬して欲しくて、気付いてもらいたくって、でもどうしたらいいかわからないから友達に相談したら、『素直に告白できないなら違う人に告白して意識を自分の方へ持つてこさせればいいのよ』と言われたこと。そんなの普通じゃないし上手くいかないと分かっていたながらも何も言えなかったこと。そして、相談した友達も女の子と同じ人が好きだったこと。告白した相手が自分に好意を持っていたこと。それを友達が知っていたこと。

つまり、ハメられたのだ。気の弱い女の子の性格を利用して、その気もない男の子に告白させれば邪魔者は消えるから。何処までも歪んでいて、人の形をしている欲望のカタマリだった。私を役に当てはめるならきつとあの友達なんだから。

事の状態を全て理解した女の子の想い人は、戸惑いながらも、彼女の、妹の気持ちに応えてあげる。あとは……………、色々あったけど色

々ありすぎて覚えてない。でも、これだけは鮮明に覚えてる。
舞台上の妹はとても勇ましく、なによりも、美しかった。

*

*

「演劇部の公演はいかがだったでしょうか？ 五分後にキャストが挨拶に向かいますので、その間にアンケートのご記入をしていただければ幸いです。では最後に、ありがとうございますー！」

そう言っただけで、部長。他のキャストが舞台袖へと移動した。

それを最後まで見届けてから、私は席を後にする……と、

「あれ、妹さんに会わないの？」

「別に……家で毎日会うし」

「あー、それもそうだけど、『面白かったよー』とか言っただけで、もいんじゃない？」

「じゃあ……、言っただけで」

「なんて？」

「負けないからって」

「……部長さんのこと？」

「……うん。と、声に出さないで頷いた。そして、舞台上を振り向かないで部屋から去った。というか、妹と面識のないあの生徒を色恋沙汰に巻き込むなんて酷なんじゃないか。適当に装飾された廊下を歩きながらそんなことを考えていたら、後ろから私の名前が呼ばれた。たぶん、さっきの生徒の声だと思う。

「言ってくれた？」

「いや、言えるわけじゃないでしょ」

確かに。私もよく今日知り合った生徒に部長のことを話す気に……って、……。え？ 私、言っただけ？ この気持ち、誰かに言っただけ？ それに、なんで知ってんのさ？ 知らないよ、言わないよ。だから、つまり、
「ねえ、どうして妹だって分かったの？」

「え？」

「保健室で目を覚ましたあと、『私が女の子の名前を呼んでた』って。どうしてそれで妹だって確定するの？」

「いや、だから、妹さんかなって。ほんと、推測レベルで……」

「じゃあ何で私の気持ち知ってるの？」

「いや、それは……」

私に妹がいることを知っているのは身内と、小学校の数少ない友達と、……。部長への想いだってひたすら隠してきた。この人は本当に推測なのかも知れない。だけど、何となく、気付いた。この人は、この存在は、「……獺」

「……はい」

「なんで……、どうして私の夢に干渉するの？」

「君はまだ君の生きてる世界を『夢』だと言っんですね」

「夢に決まってるよ」

そう思って私は、そう思い込まないと私は、逃げ水のように流れてしまう毎日に耐え切れない弱い私は、簡単に壊れてしまうのだ。

「確かに今は夢の中ですよ」やめる「だけど、今まで君が生きてきた世界は紛れもなく現実ですよ」知っているから『この現実が夢だったらしいのにな』なんて夢が誇大妄想の夢物語だということは。

「僕は、君をひがんでたんだと思います。同時に、羨ましかった」
うん。

「獺は自身で夢を見ることができません。だから、幸せな夢を見ることができないのに、それを『悪い夢』と言った君が許せなかった」
うん。

「どんなに恵まれても、どんなに楽しくても、僕は私は自分は不幸だと言い張って、目の前にある幸せをないがしろにするんです」
うん。……うん。

分かってる。分かってるからさ。だから、もうやめて、泣いてしまっから。涙腺決壊を起こして、喜怒哀楽の哀だけ壊れたように感情を制御できなくなってしまうから。

「だから、完全に自己満足であろうとも、僕が君の夢に干渉して、悪い夢じゃないことに、その夢の幸せに気付いて欲しかった」
ねえ、

「仲の良い妹がいて、それなりに話せる友達もいて、好きな人がいて、君を想う人がいて、それだけで、幸せなんですよ？」

知ってるよ？ 本当は、本当は、

「私が幸せを受け入れないだけで」

獏は何も言わずに話を続ける。

「君の頭の中に手を伸ばしたとき、君の人間関係と過去の記憶を覗かせてもらいました。そしたら、この子の存在が出てきました」

「でも、私は……、知らない」

「この子は君をとてもよく知っていました」

「え？」

「誰かの記憶を覗くのはとても疲れます。その人が生きてきた証が一斉に流れ込みますから。その思い出の断片にこの子はいました」
「……私は」

「これは、これだけは、思い出して、忘れないで。君が手を差し伸べるだけで、君が現実を受け入れるだけで、世界が変わるんだ」

ずっと、ずっと獏は泣いていた。私のことで獏が泣く意味が見つかからないけど、私のことで私が泣かない理由も見つからなかったから、感情に流された。そして、泣かされた。

この子のためにも、君のためにも、そう残して獏は……。

*

*

各教室の生徒達は疲弊し切った状態でくつろいでいた。校内のスピーカーからは『後夜祭で花火とキャンプファイヤーを行うため、教室の後片付けが終わり次第グラウンドに集合してください』という報告をキツカケに、だらけていた生徒達は一斉にゴミの回収や机とイスを綺麗に並べ始めた。

一通り後片付けも終わり、みんながグラウンドに向かって行く流れに乗って、情性的に私も移動する。

後から気付いたことだけど、私の記憶を読み取った獺が妹の公演名を知っているということは、つまるところ私も妹の公演名を知っていたことになる。もちろん、獺がどこかで公演名を聞いた可能性もあるけど、それは考えない方向で。だって、知っていたいのだ。私の大切な妹だから、それくらいは当たり前のこととして。

グラウンドに着くとすでに文化祭実行委員の人が生徒一人一人に花火を配っていて、打ち上げ花火の準備もしてあった。

仲の良い友達同士。何人かの固まったグループ同士。部活。委員会。同じ班。それぞれがそれぞれの交友関係で固まって輪を作る。誰とも組めない空しさは、体育の時間やレクリエーションのときに散々味わっている。だから、彼も同じ気持ちだと思う。なんとなくだけどそんな気がした。

花火を貰ったあと、火付け場の光だけを頼りに彼を探す。少し遠くの方で演劇部員達と、部長と妹の姿が見えた。妹は部長と楽しげに話をしていて、とても嬉しそうな顔をしている。たぶん、告白するつもりなんだろう。私ならそうしてる。……もうちょっと待ってる。妹め。夢から覚めて現実を取り戻したら奪いに行つてやる。

グラウンドの奥の方。ぼんやりと彼らしき人影が映る。彼だという確証を得るために、一歩、また一歩と近付いた。

保健室まで運んでくれた彼に、
獺が媒介にしていた彼に、

確かめなくつても知っていた。これは夢だから、都合良く話は進む。私は体操座りで行儀良く座っている彼を見下ろした。そして、

「こんばんは」
「誰……ですか？」

「酷いな。同じ組なのに」
朝とは全く逆の会話に笑みが零れそうになる。

「隣、座っていい？」

……コク。と、首を縦に振った。

「……あの」

「うん？」

「その、みんなと一緒にじゃなくていいんですか？」

「私と一緒にイヤ？」少し、からかつてみた。

「あ、いや、そういうことじゃなくて、えと……」

「昔話をするけど、最後まで聞いててね」

「……え？」

思い出した、忘れたくない物語。彼の知ってる物語。

彼は優しく「うん」と頷いた。

「私ね、昔から友達作るの下手だからクラスで孤立してんだ。一人でずーっと。そしたらいつの間にか一年生最後の授業になっちゃって。自分でもばっかだーって思った。そしたら授業前に筆記用具忘れたことに気付いてさ。そのときに、！」

パァーン。と、けたたましい打ち上げ花火の音が大気中に響く。

その直後『後夜祭が始まりました。火傷には充分注意して楽しみましょう』という文化祭実行委員長の声がこだました。それと同時に生徒達が一斉に手持ち花火に火を灯す。私も花火したいなと思っていると、彼が「そのときに？」と続きを要求してきたので、今は昔話を優先させることにした。

「そのときに、鉛筆を貸してくれた生徒がいたの」

「……うん」

「それから仲良くなつて、その生徒が『二年生も同じクラスになれたらいいのにな』って言ったのね。でも、違うクラスになった」

そのときはもう、忘れてたけど。

「ごめんね」

「……どうして？」

「だって、「私だけが一人ぼっちのフリをして、みんなから遠ざかってた。優しくしてくれる人や話しかけてくれる人達に壁作って、溝掘って、拒絶していたのは私の方だ。君のように接してくれる人

もいた。なのに、それをいつしか忘れてしまったんだ。そう言いたいのに、雁字搦めの感情が邪魔をする。だって、私は、
「ありがと。ちゃんと思いき出してくれて」

「……………うん」

泣きそうになるのを堪える。

今は泣くよりも笑っていたい。ぎこちないけど、不器用だけど、下手なりに上手な笑顔が浮かべられる気がしたから。気を利かせた実行委員の人が火の付いた花火を持ってきて、私と彼の手持ち花火に引火してくれた。

「ねえ」「はい」「駄菓子喫茶はこの班だった？」「……………待機班」

私と一緒に。私だけが孤立していたと思っていたのが恥ずかしい。

結局、私も見てみぬふりをしてきた人達と同じだった。でも、

「今度は一緒に回ろうね」

「うん？ ……いや、だつてもう、最後だし」

「最後かなー？」「うん。……………うん？」

戸惑う彼を横目に私は嬉しそうに呟いた。

最後じゃないよ。私が眠りについて、もう一度目を開けたら、そこから始まりなんだ。夢の終わり。本当の始まり。二回目の四年生の文化祭。彼と校内を回って、駄菓子喫茶の様子を見に行つて、妹の出演する演劇を観に行く。そして、後夜祭が始まったら、伝えたい想いを伝えたい人に。こんな自分がこんな状況で、そんなのは全部捨ててしまつて、私の気持ちだけ、私が見つけたあの人に。

花火の煙で星がよく見えなかった。代わりに沢山の打ち上げ花火と手持ち花火が揺らめいて、色とりどりの小さい星達を作る。

そういえば、妹から星が瞬く理由は大気が汚いからと聞いたことがある。綺麗な裏に潜むものがそんな理由だとは知りたくなかったけど。でも、私達はそんな醜い世界の上に成り立って生きている。オーロラが生まれる意味も、花火のあとの残骸も、美しいだけの世界じゃないと理解してるから、苦しくなったりする。だけど、私は知っている。醜い世界だと認めるときから見えるものもある。

ほら、綺麗だよ？ 私の、夢じゃない現実の世界はさ。

文化祭は色々とありすぎた。ありすぎて疲れたからもう寝るよ。あー、ごめん。君の肩貸して。……何でそんなに慌てるの？ 避けられたみたいで寂しいじゃん。いいから少しだけ。よーし良い子だぞー。……え？ 頭打ったのかった？ 眠いだけだつて。こんなに眠いのはたぶん初めてだ。まどろむ。まどろめ。もしかして、部長より君の方が素敵かも。……なんて。ん、ちょっと本気で照れないですよ。こつちが恥ずかしくなるじゃない。……そういえば、まだ君に言っただけだね。眠いから、恥ずかしいから、小声で一回しか言わないからよーく聴いててね。本当は獺にも言いたかったんだけど、この夢が覚めたらきつと会えなくなると思うから。お礼も言わずに消えるなんて酷い奴。……あー、それじゃあ、獺の分もついでに君に言うよ？ あのね、君と獺に出会えて、本当に、

「ありがとう」

side B 2 十月二十五日（金曜日）

彼女に現実を認めさせるには、長い夢から覚まさせるには、彼女の妹でもなくて、部長でもなくて、この子の姿が適任だった。

ぼんやりした記憶。奥底の潜った記憶。水中から景色を覗いたように不透明な記憶だったけど、他のどの思い出よりも輝いていた。

いつも一緒だった姉妹の風景。

小学校の友達と遊んでいる風景。

心が苦しくなる風景。

沢山の醜さと綺麗さを知って生きてきた。

獺は人間だ。正確には人間だった。昔、誰かに教えてもらったことがある。叶えたい夢を持っていた人間が寿命や病気以外の志半ばで死んだとき、稀に獺になるときがあると。

そうして獺になった人間は、生きていくときに叶わなかった願いを

記憶していると辛いから、誰かの悪い夢をひたすら食べ続け、本能的に幸福の夢を侵食して忘れようとする。

だから、僕も人間だったころに、彼女のよくな過去があったのかもしれない。弟か妹か兄か姉がいて、沢山でなくても友達がいて、誰かのことが気になって、喜んだり落ち込んだり、蛇行する毎日が何処かにあった気がするんだ。叶えたい夢だつて。悪い夢ばかり食べ過ぎて、いつしかそんなこと忘れてしまった。

いつからだろう、僕は獺になっていた。ひたすら夢の中を歩いて、方向感覚なんて全くない夢の路。彼女の夢に関与したら何か変わると思っていた。そして、何も変わらなかった。彼女は現実を受け入れる気持ちになれた。弱いけど、強いんだ。でも、僕は何か変わったのだろうか？ 分からないけど、きつと変わってないな。

『ねえ』 『……はい？』

彼女の声によく似た女の子が後ろから話しかけてくる。

『見てるでしょ。見えるでしょ。これは悪い夢なんかじゃない。私は幸せよ？ もちろんこれは夢だけど、きつと現実でもそう言うと思う。あなたは？ あなたにはこれが悪い夢に見えるとか言うの？』

『だったら食べてみなさいよ。私は、幸せよ？ あなたは悪い夢しか見れないそうだから、この夢を、私が見る幸福な夢をあなたにプレゼントします。だから、この先悪い夢を見続けてもこれだけは思い出して、忘れないで、あなたは幸福の夢を見ることができるようよ。誰かに幸福の夢を見せることができるのよ。彼にはもう言ったけど、あなたにも、ありがとう。私は止まらないよ』

……うん。分かってる。大丈夫。僕は振り返らずに言った。たぶん、彼女は幸せそうに笑っていた。僕は酷く泣いていたから、君の顔が見れなかった。前に進もうと決めた彼女を不安にさせてはいけなから。僕は唇を噛んで、震える気持ちを落ち着かせ、前を向いたまま彼女に『ありがとう』と投げ掛ける。そもそも、僕の幻聴かもしれないけど。

叶うなら、今度は幸福な現実で彼女に会いたいと思う。そう信じて

僕は、これからも幸福の夢が見れるように、誰かに願い事をした。

(後書き)

この小説ばかりはごちゃごちゃあとがきを書きたくないと初めて
思いました

何かを感じてもらえれば嬉しいです。ただ、それだけです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0820j/>

獏は幸福の夢を見る

2011年1月25日02時00分発行